

書評

村松定孝氏著「泉鏡花」

大橋清秀

最近の出版界に於ける目立つた二つの傾向、それは文学アルバムと作家評伝である。泉鏡花に関しては村松定孝氏の「恋あやめ」朝日新聞夕刊昭和二年六月二日一回、朝日新聞社版、新潮連載、の一年十一月八日一七〇回、朝日新聞社版、新潮社版、の二として「泉鏡花」がある。前者は所謂実名小説の傾向を持つものであり、後者は読み物としての伝記である。

これに対して村松定孝氏の「泉鏡花」は研究的な評伝である。しかし学術論文調のものではない。研究書らしくない研究書である。とにかくよく調べてある。人の伝なるものは生存者でも明らかにし難いものである。この書を読んで先ず感ずることは、さらさらと書かれてはいるが、多くの資料、作品による考証、が根底にあつてはじめて書かれていることである。殊に鏡花が世を去る前の年に著者は鏡花を訪ねて直接話をきいたことが書かれているが、談たまたま秋成の雨月、西鶴の百物語に及び、鏡花が「西鶴には幽霊が解らない。だから計算ついで幽霊を扱つたりするんです」と言つてゐることによつて、鏡花の作品に於ける神秘的なものが単なる小説上の技巧ではなくて、むしろ創作以前の彼の日常性に基くものであることを悟つた^{同書一}二二頁としていられるあたりはなほ興味深い。これは著者も「幼ない鏡花の日々も、さうした暗い家の中で、北國の自然

が生んだ怪奇な口碑や伝説の類を母だの町内のうつくしき娘たちの口から聴かされて過ご」^{同書一}六頁したと述べていられるように鏡花の生育した風土、環境から推しても当然のことであるが、本書がこのような点に於ても鏡花と云う人間に迫り得ていると思ふのである。

又觀念小説について「先生は、どんなお氣持から、あゝした作風のものを書かれたのですか」と云う著者の間に鏡花は一種ほろろにがそうな笑みを湛えて、「私はたゞ先生（紅葉山人）のお力添へで、あれを文芸倶楽部でしたかに發表することが出来たまででして、くわんねん小説と云ふレッテルを貼つたのは田岡（嶺雲）さんあたりでせう。えゝ、たゞ心の赴くまゝを書いたのだと思ひます。（略）くわんねん小説なんて迷子札は先生もご存じない間に批評家が私と川上（眉山）さんにつけたんで、そこが自然主義の人達が自分でも然主義のお題目を構へながら暴露小説（？）を書いたのとは訳が違ひます。」^{同書}七五頁と答えているのであるが文学史家にとつて看過し難いところであらう。

次にこの書の中核をなしているものは鏡花の作品研究であることである。鏡花の作品そのものによつて人間鏡花を形成している。これはこの書の副題に「生涯と芸術」とある如く作家の伝記を考究する時当然のことである。即ち作品の中に鏡花その人の姿を認めて述べられていて、「名媛記」「一之巻」：「誓之巻」「外科室」「照葉狂言」等々その例は枚挙にいとまがない。一言で言えば実証的であることである。はなはだ信頼に足ると考へるのはこの故である。

さて鏡花は生涯女性を描いた。それも可憐にはかない女性を。鏡

花は幼時、絵を好み中でも最も好んで描いたのは「可憐なをためが樹上に縛りあげられ、打擲されてゐる場面」^{同書一}であつたと泉鏡汀が語つている。著者はこれによつて鏡花の作品に於ける被虐的傾向を解明して居られる。鏡花は明治大正昭和の三代に生きなければならず、やはり泉鏡花は明治の作家であつた。鏡花の描くところの女は明治の女であり、最も明治の女らしい女性であつた。薄幸と悲哀とはかなさの中に生きる女に明治と言う時代を感じ、未だ近代化されざる半封建的な明治と言う時代に抗し意氣によつてうつくしく生きた鏡花の女性を私はみとめるのである。そして私は鏡花の二人の妹、たか女とやへ女とがそれぞれ他家へ養女にやられたことも、鏡花の女性觀に影響を与えているのではないかと思う。「母の慕はしさと、姉の懐しさと、更に女の恋しさ」^{同書二}と著者は鏡花の愛を言つていられるが、鏡花の母が、又鏡花の恋う姉や女が生きた明治と言う時代、社会性に今すこしく触れることによつて、鏡花の人と作品がより明らかにされるのではなからうか。

これは鏡花の師弟關係についても言える。もう再び鏡花のような人は出るまい。そして鏡花の文章はどのようにして生れたのであろう。或る人は悪文と言ひ或る人は名文と評する。鏡花の文学についても毀誉なかばする。しかし多くの人は鏡花の作とは知らずとも「婦系図」は知つている。「瀧の白糸」の舞台に涙しているのである。鏡花の文学は大家のものになつてゐるのである。そして新派と鏡花とのつながりは深い。このあたりもつと掘り起す必要があるように思われる。

この書に於ては大正以降は比較的簡單であるが、これを要するに現在までの村松定孝氏の鏡花の文学研究の成果とみてよいであらう。しかも誰にも読みやすく平易に叙述されている。平易に書くと言うことはむつかしい事である。さりげなく書かれてゐる一言、それが、單なる想像であつてはならないのである。こつこつと積みあげられ小さな穴を一つ一つうずめてゆかれたものが結実したのである。これは著者の鏡花への愛によるところであらう。

文学鑑賞はその作品を読むことにはじまり終る。しかしその作品を作つた作家への好奇の心はおさえ難い。そして作品を通して人間を追求し、人生を探求し、人生いかに生きるべきかを考えることも大きな命題とすれば、作家を知ること、又欠くことの出来ぬこと、言わねばならない。そしてしばし作品に酔ひ、作品の真髓に到達するためには作家を知り、作家の人と周辺を知ることが大きな手がかりとなるであらう。その意味で文学アルバムや評伝が公刊されていることをよろこび、これらによつて文学作品研究が一層進展することを期待するのである。

河出文庫の「泉鏡花」は多くの人の手にわたつて読まれるであらう。鏡花の弟斜汀の一子と学校生活を共にし、明治生れの女を母に持つ私にはことさらなつかしい作家である。そのおもいが門外漢の私をしてかゝる拙文を書かせたのである。著者に比すれば私の鏡花への愛は小さなものである。

(河出文庫二一九ページ・七〇円 河出書房 昭和二九年七月刊)